

最新事情

高校編⑧

**就業意識の高い生徒に
知識と技能、そして自信を付けさせる**

都立江東商業高等学校

(東京都江東区)

東京都には9つの都立商業高校がある。その中でも1905(明治38)年開校と最も長い歴史を誇る江東商業高等学校。約500名の生徒たちは、ほとんどが江戸川区・江東区を中心とする。東京都の東部地域から通学している。日本の産業の中心地・東京の商業高校の取り組みについて伺った。



亀戸天神のすぐ近くに建つ
江東商業高校



生徒昇降口の柱は
そばの珠をモチーフにしている

資格取得などで 内定率100%を維持

藤棚で有名な亀戸天神のすぐそばに建つ都立江東商業高等学校は、創立から100年を超える伝統校である。平成15年に商業科と情報処理科を統合。以来「総合ビジネス科」として、2年生以降で事務系・販売系・情報系の科目から、進路や将来の希望に合わせ、学びたい内容を選ぶ選択科目制を取っている。1学年は35人×5クラス、8割が女子生徒だ。パソコンを使う情報処理や英語、簿記・会計などの専門科目は、1クラスに何人かの教員が付く少人数制や習熟度別の授業による指導で成果を上げている。また、海外との交流も積極的に行っており、

今年の1月1日付で、韓国の商業高校である一山情報産業高等学校と姉妹校の協定を締結した。今後、教育課程の共有や、進路活動、文化体験、語学教育などの面で協力していくことになる。学校全体として幅広い視野で商業教育に取り組み姿勢を打ち出している。

さらに、商経関係の学部を持つ大学との連携を進め、生徒により高度な知識や資格が取得できるよう取り組んでいる。

赴任して2年目という金城和貞校長は、同校の印象を「とてもまじめで、礼儀正しい生徒が多い」と話す。

「1年生のうちに、あいさつなどの基本的習慣ができていきます。就職でも進学でも学校推薦の形がほとんどですから、どこに出ても恥ずかしくないよう、常に『江商生』という意識を持つて過ごしてほしいですね。」

身だしなみに関する校則の厳しさは、中学生に配る学校案内のパンフレットにも明記されているほど。日ごろから教員が率先して声を掛け、あいさつをし、服装などを注意することで、最初は戸惑う生徒も上級生になれば自然にきちんとした振る舞いが身に付いているそうだ。

全国的に高卒者の就職難が問題となっている。昨今、東京での状況はどうなっているのか。

「東京という土地柄もあり、求人絶対数は他の地方と比べると多いですが、それでも昨年に比べると半減しています」と金城校長。インターネットでの求人が増えたことにより専門学校、



金城和貞校長



岩崎豊先生

短大・四大、大学院生、社会人の転職者や、近隣の他県の求職者など、競争相手も増している。厳しいのは全国的な状況と変わらないようだ。その中で、同校は就職希望者の内定率 100%と健闘している。

「厳しい状況でも希望する進路に進めるよう、資格取得を推進し、面接指導などの機会を多く取り入れています。本校では生徒の5割強が就職し、その約7割が事務系の職に就きます。学校としてはやはり専門知識を深められる事務職を推奨しているのですが、販売やサービス職に就く生徒も増えています」。

秘書検定で 社会人の基礎を学ぶ

同校では、3年生の「課題研究（秘書実務）」で秘書検定に取り組んでいる。授業を選択して

いる生徒は約60人だが、個人的に希望する生徒も10人ほど受験しており、秘書検定の認知度が年々高まっていることがうかがわれる。平成21年度は成績の優秀さを認められ、団体で文部科学大臣賞を受賞した。

指導に当たる岩崎豊先生は授業について次のように語る。

『「秘書実務」の内容は毎年、生徒の希望により変えているのですが、最近では、絶対に秘書検定を取りたい」という声が多く、検定対策が中心になっています。全員が6月に3級、11月に2級の受験を目指しており、2学期の後半以降は準1級の筆記試験問題を使って指導をします。3学期の期末試験は準1級の範囲から出題します。今の指導スケジュールでは、準1級取得には間に合いませんが、筆記対策までできているので卒業してからも受験するよう薦めています」。

今年、30人×2クラスでの開講となったが、それぞれのクラスに男子生徒が4、5名ずついるのだそう。「こんなに男子が受けるのは初めて」と岩崎先生の顔もほころぶ。

授業は参考書と実問題集を使って進めるが、選択問題でも筋道を立てて考え、ポイントや間違っただ理由などを問題集に直接書き込んでおくように指導している。

「一度説明したくらいではなかなかすぐには覚えられないものです。水引について、何も言わずに『お葬式の結び方はどっちでしょう?』

今年度、「課題研究（秘書実務）」を受講する生徒たち。
6月の検定に向けて、急ピッチで3級を勉強中だ



と見せてみるとすぐには答えられない。間違えた方が印象に残りますから、あまり最初から正解を教え込まず、自分で考えさせるようにしています。何度か類題を繰り返してできるようにしたとき『最初はよく間違えていたね』と言うと、できたことが達成感にもなります」。

社会人のマナーなど最初は分からないことばかりでも、3級、2級の内容を一通り学び終えると、そこからさらに面白くなってくるようだ。言葉遣いや電話の取り方などは、すぐに役立つこともあり、卒業するころには目に見えて生徒の様子が変わっているという。「ビジネス文書検定やサービス接客検定など、他の検定も受け



企業の担当者や卒業生を
招いて行う進路懇談会。
生徒たちは興味のある企業や
先輩の話積極的に聞きに行く

たいという生徒もいます。そういう声にも対応できるようにしていきたい」と岩崎先生は意欲を見せる。

「秘書検定はどの分野に就職しても、また進学しても、いずれ必ず必要になる知識と技能。今の社会全体に欠けている『相手を敬う』という気持ちも身に付くのではないのでしょうか。できれば1年生などのもっと早い段階で、全生徒に受けさせたいですね」と金城校長も、秘書検定を高く評価している。

視野を広げて 進路決定に生かす

入学時から、多くの生徒は「い

ずれ社会に出て働く」という意識を持っている。大学や専門学校に進む生徒も、何となく進学するのではなく、働くことがしつかりと視野に入っているという。

ただし、働きたいとは思っていても、どんな職業があるのか、どんな企業があるのかまでは分かっていないのではないかと。金城校長はその対策として「できるだけ視野を広げ、イメージを膨らませておくことが必要」と話す。

進路指導では、1年生から適性検査を行い、インターンシップや企業見学会などをはじめ、さまざまな取り組みを行っている。

2年生を対象に、2月に3年生による「出前進学・就職体験談」を各クラスに分かれて実施している。身近な先輩のホットな体験を聞き、あらためて卒業後の進路を確認していくための大きなきっかけとなっている。

また、3年生の1学期に行う「進路懇談会」は同校の卒業生や、企業、大学、短大、専門学校の担当者を90名ほどを招いて行う。各教室に2、3のブースを設置し、3年生の生徒たちはそれぞれ先輩や興味のある企業や学校の担当者に話を聞いて回るのである。仕事の概要や働きがい、どんな能力が必要か、どんなことが学べるかなど、アドバイスを求めて生徒たちは積極的に質問をするという。

簿記などの専門的な資格や秘書検定も、学んだ成果を表すものとして重視しており、「生徒は在学中に多くの資格を取得しており、

就職活動で提出する資格のリストは、別紙を要しなければならぬほどの数になります。逆に、別紙が必要ないくらいの数では駄目だよ、とハッパを掛けることも。生徒たちも、それを目指して学ぶことがモチベーションになります」と言う岩崎先生は、生徒にできるだけ多くの資格を取得させるため、その動機づけとなるよう、自分でも常に資格を目指すようにしているそうだ。なんとこれまでに取得した資格は、税理士や宅地建物取引主任者、行政書士、調理師……と約70種類。夜間と土曜日を利用して大学院に通い、修士号も取得した。

教え子が大学院に進学したり、公認会計士試験や税理士試験に合格するなど、うれしい報告も受けているという。先生自身が学ぶ姿を見ることが生徒たちにはよい刺激になっているようだ。

生徒にとっては教員が一番身近な「大人」である。あいさつも身だしなみも、そして仕事に取り組む姿勢も、まずは教員が手本になること。その姿を見て、生徒は自分の進むべき道を決めるのである。江東商業高校の指導では、率先垂範が生きていることが感じられた。



3年生が2年生の教室に向かい進路・就職体験談